美 唄 の 鳥 類

1. 生息期間と生息環境

藤 巻 裕 蔵*

The Birds of Bibai, Central Hokkaido

1. Time of occurrences and habitats of birds.

Yuzo FUJIMAKI*

Summary: Observations were made on birds at Bibai, situated in the northern part of Ishikari Plain, central Hokkaido, from April 1966 to November 1973. Bibai occupies an area of 275 km². The western half is occupied largely by cultivated fields, greater part of which is rice paddies and the eastern half is hills covered with deciduous trees. There are residential portions along the artery street running from north to south. Mean temperature showed 6.8°C, varying from -8.0°C in January to 21.9°C in August. There was snow cover which attained a depth of 1 m from late December to early March.

A total of 105 species of birds were recorded during the study. In the present study, the birds fell into resident, summer visitor, winter visitor or transient according to seasons that they occur in Hokkaido. Summer visitors and residents included 57 and 30 species, respectively. The remaining was winter visitors, transient, or rare species. They were recorded from Ishikari Plain by previous workers except for *Cygnus olor* which is considered to be a fugitive from a park. By the present study it was appear that *Motacilla alba*, *Turdus naumanni* and *Sturnus cineraceus* wintered in small numbers in Bibai. In addition, a indirect evidence showing the breeding of *Zosterops palpebrosa* was obtained.

The number of species increased with summer visitors arriving at from April to June and decreased from October to March of next year. Therefore the winter avifauna was characterized by rather small number of species as compared with that of central Honshu.

The study area includes deciduous forests, cultivated fields, bogs, swamps, riservoirs and residential portions as habitats of birds. Consequently the avifauna of Bibai consists of forest and grassland birds, waterfowl and birds occurring at residential portions. Of forest birds, however, species preferring coniferous forest occurred only in winter. *Locustella ochotensis*, which occurs ordinally in grassland of northern and eastern Hokkaido, was not recorded from Bibai.

はじめに

美唄は石狩平野の北部にあり、面積 275 km² の市である。この市の東半分はなだらかな丘陵地帯で、大部分は樹木におおわれている。また西半分は低地帯となっており、その西端は石狩川に接している (Fig. 1)。低地帯の大部分は水田であるが、一部にはまだ泥炭地が残されており、数多くの沼が散在する。南北に国道と鉄道が通っており、国道沿いに数か所の市街地がある。その最大のもは、市のほぼ中央にある美唄駅周辺で、市街地のまわりには住宅地が広がっている。

このような種々の環境条件に、森林、草原、湿地、水

辺の鳥類が生息するのであるが、これまで美唄の鳥類について詳しく調べられたものはなく、わずかに石狩平野の鳥のリスト (井上, 1947) と美唄市史 (美唄市史編さん委員会, 1970) の簡単な記述があるにすぎない。

私は、1966年4月以来、美唄の鳥類の観察を続けているが、今回の報告ではこれまでに観察した鳥類のリストをあげ、各種の生息期間とおもな生息環境などについて述べる。

調査地と調査方法

環境条件をいくつにも分けることはできるが、そのうち主なものを類型化し、次の通りとした (Figs. 1, 2)。

A. 落葉広葉樹林: 光珠内にある道立林試の東側の丘陵地帯と2号川溜池のまわりの二次林である。主な樹種

* 北海道立林業試験場
Hokkaido Forest Experiment Station

Fig. 1. Map of Bibai.

A: deciduous forest (Koshunai and Minenobu), B: cultivated field contiguous wooded hill (Koshunai), C: cultivated field (Kaihatsu and Nishi-bibai), D: residential portion (Bibai), E: residential portion where houses concentrate (Bibai), F: bog (Kaihatsu), G: swamp (Miyajima-numa and Oyako-numa), H: reservoir (Nigo-gawa, Sango-gawa and Rokugo-gawa Reservoirs).

はイタヤ、ミズナラ、シナで、樹高は10~20 mである。林床にはクマイザサがある。一部にカラマツ、トドマツ造林地がある。

B. 丘陵地帯につづく農耕地: 道立林試のまわりの畑、水田地帯である。所々にカラマツ、シラカンパなどの小林地があり、農家が点在する。

C. 低地帯の農耕地: 開発、西美唄の畑、水田地帯である。所々にヤチダモの防風林、カラマツ、シラカンパなどの小林地があり、農家が点在する。

D. 住宅地: 美唄の住宅が密集していない地域で、家のまわりにはシラカンパ、カラマツ、ポプラなどの樹木があり、小規模な畑もある。また所々に空地があり夏には草本類が茂る。

E. 住宅密集地: 美唄駅前周辺の街の中心地域で、住宅が密集し、植物としては街路樹がある程度である。

F. 泥炭地灌木草原: 開発にあり、農耕地の中に開拓されないで残された部分である。植物堆積によって形成されており、湿潤な部分には、ツルコケモモ、ワタスゲ、エゾイソツツジなどが生育している。乾燥している所にはクマイザサや灌木がある。

G. 沼: 西美唄にある宮島沼と親子沼である。前者は

美唄で最大の沼で、その面積は約 30 ha、後者の面積は約 8 ha である。周囲は水ぎわから 30~50 m の範囲にキタヨシが群生しており、さらにその外側は水田・畑となっている。

H. 溜池: 丘陵地帯の沢部につくられた農業用の貯水池である。調査したのは、2, 3, 6 号川溜池で、面積はそれぞれ 15, 7, 1 ha である。周囲はいずれも広葉樹林で、上流部は浅くなって、キタヨシ、トクサなどが群生している。このうち 3 号川では、8 月以降放水のため水が少なくなる。

なお、環境条件による生息状況のちがいについては、別に詳しく報告する予定なので、調査地の説明はこの程度にしておく。これらのうち、C と F では 1971 年から、G では 1972 年から観察を始めたので、多少資料不足の点がある。

美唄の平均気温は、年平均 6.8℃、最高が 8 月の 21.9℃、最低が 1 月の -8.0℃ である。10 月中~下旬に初雪が降り、12 月下旬に根雪となる。積雪は 1 m 前後、3 月中~下旬に積雪が消える。冬期間は沼、溜池は結水する。

調査は随時行ない、春から夏にかけては早朝に観察を

Fig. 2. Study areas.

A, B, C, D, E, F, G and H are the same as in Fig. 1.

行ない、できるだけ多くの種類を確認できるようにした。観察には8倍の双眼鏡と20倍の望遠鏡を使用した。

リストと生息期間

これまでに観察した鳥類は105種である。これらの種名、生息期間、主な生息環境、繁殖の有無をTable 1に示す。繁殖について、「Br」は、巢、卵、ひな、単立幼鳥によって確認したもの、「Br?」は生息状況からみて繁殖すると思われるものである。表中の種の配列、学名は、日本鳥学会(1971)によった。

美唄における留鳥は、カラス類、スズメ、キツツキ類、シジュウカラ類など15種である。カケス、キクイタダキ、ヒガラなどのように北海道で留鳥であっても美唄には夏の間生息しないものが15種いる。

夏鳥は57種おり、もっとも多い。ここでいう「夏鳥」とは、北海道には夏に渡来するもので、本州以南で越冬するいわゆる「漂鳥」と日本より南方で越冬するもの両方を含む。前者の多くは3~4月に渡来し、10月に渡去する。後者はすべて4~5月に渡来し、8~9月に渡去し、前者よりも美唄における生息期間は短い。後者に属する種のうち、オオジシギ、カッコウ、ハリオアマツバメは、まれに10月まで生息することがある。なお夏鳥のうちコルリ、ムシクイなどの一部分は、渡来時に一時寄るだけである。

旅鳥または冬鳥は、ガンカモ類、キレンジャク、ツグミ類など11種である。このほかまれに出現するワシタカ類、シギ類、カモメ類などがいる。

石狩平野の鳥類として、井上(1949)は129種をあげている。さらに野幌原生林(札幌営林局, 1971, 1972)、藻岩山(藤巻, 1967b)、石狩川河口付近(藤巻, 1959など)などを加えると、石狩平野の鳥類は180種近くになる。美唄で観察された105種のうち、コブハクチョウ以外は上にあげた記録に含まれている。

Table 1にあげた鳥類のうち、一部について若干の説明を加えておく。

ヒシクイ *Anser fabalis*: 1970年4月25日に上空を北方へ飛ぶ25羽を観察しただけで、沼ではまだ一度も見られてない。井上(1947)のリストにはマガン、ヒシクイがあり、春と秋の渡り時期は「稍多数出現」としたという。このことにも、最近のガン類の減少の事実がみられる。

コブハクチョウ *Cygnus olor*: 1973年5月22日と6月10日に親子沼で、頭部と頸が灰白色の1羽を観察した。この近くでは余市と苫小牧でコブハクチョウを飼育している。沿海地方南部のハサン地方で1962年3月

30日に3個体が観察されているので(SHIBAIEV, 1971)、この種が北海道に渡来する可能性は否定できないが、今回の観察例は、時期的にみて、飼育中に逃げた個体に思われる。

シマアジ *Anas querquedula*: 1973年5月22日と親子沼で雄1、雌1羽が観察された。この種はまれな冬鳥とされており、北海道では札幌と瀧渇湖で記録されているだけである(清棲, 1965; 黒田, 1969)。

オジロワシ *Haliaeetus albicilla*: 1973年4月15日に宮島沼の氷上で餌を食べている未成鳥1羽を観察した。冬期間、千歳市の肉処理センター付近には数羽のオジロワシが飛来するというから(小山政弘氏の私信)、石狩平野でも少数が越冬していると考えてよいであろう。

ハイタカ *Accipiter nisus*: 1973年3月1日に住宅地でハシブトガラスに追われている1羽を観察した。北海道では夏鳥であり多くないとされているが(日本鳥学会, 1958)、今回の記録のほか、12月に釧路で観察されている(KEITH and YOSHII, 1962)。

ハクセキレイ *Motacilla alba*: 一般に北海道では海岸に多い夏鳥とされているが(日本鳥学会, 1958)、美唄のような内陸でも数は相当多く、冬にも少数であるが普通に見られる。したがってこの種は北海道で一部留鳥とするべきであろう。

アカモズ *Lanius cristatus*: 数はそれほど多くないが、夏には比較的によく見られる。また札幌でも普通に繁殖する(石城, 1966)。しかし、野幌国有林の動物調査書(北海道林業試験場, 1934)や井上(1947)のリストには含まれていない。現在普通に見られるような種が古いリストに含まれないことは、その当時この種が生息しなかったか、または非常に少なかったことを示唆しているように思える。

ツグミ *Turdus naumanni*: 北海道では旅鳥とされているが(日本鳥学会, 1958)、冬中少数個体が見られる。12月に阿寒湖畔で100羽以上も観察されたことがある(KEITH and YOSHII, 1962)。

メジロ *Zosterops palpebrosa*: 1971年7月14日光珠内の広葉樹林で成鳥1羽と巣立幼鳥3羽を観察した。北海道でメジロの繁殖が確認されているのは函館だけであるが、三島(1959)は、秋に札幌や小樽を通過する個体がいることから、その北部に繁殖地があることを示唆していた。上記の観察結果から、美唄でも繁殖することは確実であろう。また冬にもカラ混群の中に見られることがある。これまでに2、6~8月の観察記録しかないが、周年生息する可能性が強い。

Table 1. Time of occurrences and habitats of birds found in Bibai, central Hokkaido from 1966 to 1973.

Species	J	F	M	A	M	J	J	A	S	O	N	D		Habitat
<i>Podiceps ruficollis</i>	-	-	-	○	○	○	○	○	○	+	-	-	Br	G, H
<i>P. griseigena</i>	-	-	-	○	○	○	○	○	-	-	-	-	Br	H
<i>Ardea cinerea</i>	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-		H
<i>Anser fabalis</i>	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>Cygnus olor</i>	-	-	-	-	+	+	-	-	-	-	-	-		G
<i>Anas platyrhynchos</i>	-	-	-	-	-	-	+	-	-	○	-	-		G, H
<i>A. poecilorhynchos</i>	-	-	-	○	○	○	○	○	○	○	-	-	Br	G, H
<i>A. crecca</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-		G
<i>A. penelope</i>	-	-	-	○	-	+	-	-	-	-	-	-		G, H
<i>A. acuta</i>	-	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-		G
<i>A. querquedula</i>	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-		G
<i>Aythya fuligula</i>	-	-	-	+	-	-	+	-	○	○	-	-		G, H
<i>A. marila</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-		G
<i>Milvus migrans</i>	+	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	Br?	A, B, C, D
<i>Haliaeetus albicilla</i>	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-		G
<i>Accipiter gentilis</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	+		A
<i>A. nisus</i>	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>Buteo buteo</i>	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	-	-		A, B
<i>Falco subbuteo</i>	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-		A, B
<i>Coturnix coturnix</i>	-	-	-	○	○	○	○	○	-	-	-	-	Br	C, F
<i>Phasianus colchicus</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	Br	A, B, C
<i>Rallus aquaticus</i>	-	-	-	-	-	+	+	+	-	-	-	-	Br	F
<i>Porzana fusca</i>	-	-	-	-	-	○	○	+	-	-	-	-	Br	B, C, F
<i>Gallinula chloropus</i>	-	-	-	-	○	○	○	○	○	-	-	-	Br	G, H
<i>Tringa nebularia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-		
<i>T. glareola</i>	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-		
<i>T. hypoleucos</i>	-	-	-	○	○	○	○	○	+	-	-	-	Br	B, C
<i>Scolopax rusticola</i>	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-		A
<i>Gallinago hardwickii</i>	-	-	-	○	○	○	○	○	+	+	-	-	Br	B, C
<i>Larus ridibundus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-		G
<i>L. canus</i>	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-		G
<i>Sterna hirundo</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-		G
<i>Streptopelia orientalis</i>	-	-	-	○	○	○	○	○	○	○	-	-	Br	A
<i>Sphenurus sieboldii</i>	-	-	-	-	-	○	○	+	+	-	-	-	Br?	A
<i>Cuculus canorus</i>	-	-	-	-	○	○	○	○	+	+	-	-	Br	A, B, C
<i>C. saturatus</i>	-	-	-	-	○	○	○	○	-	-	-	-	Br	A
<i>Caprimulgus indicus</i>	-	-	-	-	○	○	○	-	-	-	-	-	Br	A
<i>Chaetura caudacuta</i>	-	-	-	-	-	○	○	+	+	+	-	-		A
<i>Apus pacificus</i>	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-		G
<i>Halcyon coromanda</i>	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-		A
<i>Alcedo atthis</i>	-	-	-	-	+	+	+	-	-	-	-	-	Br	H
<i>Jynx torquilla</i>	-	-	-	-	○	○	○	-	-	-	-	-	Br?	A, B
<i>Picus canus</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	Br	A
<i>Dryocopus martius</i>	-	-	-	-	+	-	-	-	+	-	-	-		A
<i>Dendrocopos major</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	Br	A
<i>D. leucotos</i>	-	-	-	-	○	○	○	○	-	-	-	-	Br?	A
<i>D. kizuki</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	Br	A
<i>Alauda arvensis</i>	-	-	+	○	○	○	○	○	○	○	-	-	Br	B, C, F
<i>Denlichon urbica</i>	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-		G
<i>Motacilla cinerea</i>	-	-	-	-	○	○	○	○	+	-	-	-	Br?	A
<i>M. alba</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	Br	B, C, D
<i>M. grandis</i>	-	-	+	-	-	-	-	-	-	+	+	+		B, D
<i>Anthus hodgsoni</i>	-	-	-	-	○	-	-	-	○	○	-	-		B, C
<i>A. spinoletta</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-		C

Table 1. (Continued)

Species	J	F	M	A	M	J	J	A	S	O	N	D		Habitat
<i>Hypsipetes amaurotis</i>	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	Br	A
<i>Lanius bucephalus</i>	-	-	-	O	O	O	O	O	O	O	-	-	Br	A, B, C
<i>L. cristatus</i>	-	-	-	-	O	O	O	-	-	-	-	-	Br	C
<i>Bombycilla garrulus</i>	O	O	+	+	-	-	-	-	-	-	+	O		A, D
<i>Troglodytes troglodytes</i>	-	-	-	+	-	-	-	-	-	+	+	+		A
<i>Erithacus calliope</i>	-	-	-	-	O	O	O	O	+	-	-	-	Br	F
<i>E. cyane</i>	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-		A
<i>Saxicola torquata</i>	-	-	-	O	O	O	O	O	O	-	-	-	Br	B, C, F
<i>Turdus sibiricus</i>	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-		A
<i>T. cardis</i>	-	-	-	O	O	O	O	O	-	-	-	-	Br	A
<i>T. chrysolaus</i>	-	-	-	+	O	O	O	O	O	-	-	-	Br	A
<i>T. pallidus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-		A
<i>T. naumanni</i>	+	+	O	O	+	-	-	-	+	O	O	+		A, B, C
<i>Cettia squameiceps</i>	-	-	-	O	O	O	O	-	-	-	-	-	Br	A
<i>C. diphone</i>	-	-	-	O	O	O	O	O	O	O	-	-	Br	A
<i>Locustella fasciolata</i>	-	-	-	-	O	O	O	O	-	-	-	-	Br	A
<i>L. lanceolata</i>	-	-	-	-	O	O	O	O	-	-	-	-	Br	F
<i>Acrocephalus bistrigiceps</i>	-	-	-	-	O	O	O	O	O	-	-	-	Br	B, C, F
<i>A. arundinaceus</i>	-	-	-	-	O	O	O	O	-	-	-	-	Br	B, C
<i>Phylloscopus borealis</i>	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-		A
<i>P. occipitalis</i>	-	-	-	-	O	O	O	O	-	-	-	-	Br	A
<i>Regulus regulus</i>	O	O	O	-	-	-	-	-	-	O	O	O		A
<i>Muscicapa narcissina</i>	-	-	-	-	O	O	O	O	-	-	-	-	Br	A
<i>M. cyanomelana</i>	-	-	-	-	+	+	+	-	-	-	-	-	Br?	A
<i>Parus palustris</i>	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	Br	A
<i>P. ater</i>	O	O	O	+	-	-	-	-	O	O	O	O		A
<i>P. major</i>	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	Br	A
<i>Aegithalos caudatus</i>	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	Br	A
<i>Sitta europaea</i>	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	Br	A
<i>Certhia familiaris</i>	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-		A
<i>Zosterops palpebrosa</i>	-	+	-	-	-	+	+	+	-	-	-	-	Br	A
<i>Emberiza cioides</i>	-	-	-	O	O	O	O	O	O	O	-	-	Br	B, C
<i>E. fucata</i>	-	-	-	O	O	O	O	O	O	-	-	-	Br	B, C, F
<i>E. rustica</i>	-	-	-	O	-	-	-	-	-	O	O	-		A, B, C
<i>E. aureola</i>	-	-	-	-	O	O	O	O	+	-	-	-	Br	F
<i>E. spodocephala</i>	-	-	-	O	O	O	O	O	O	O	-	-	Br	A
<i>E. schoeniclus</i>	-	-	-	O	O	O	O	O	+	-	-	-	Br	C, F
<i>Fringilla montifringilla</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	O	-	-		A
<i>Carduelis sinica</i>	-	-	O	O	O	O	O	O	O	O	+	+	Br	A, B, C, D
<i>C. spinus</i>	O	O	O	O	-	-	-	-	-	-	O	O		A
<i>Uragus sibiricus</i>	-	-	-	-	+	+	+	+	+	O	-	-	Br	F
<i>Pyrrhula pyrrhula</i>	O	O	O	+	+	-	-	-	-	-	+	O		A
<i>Eophona personata</i>	-	-	-	-	O	O	O	O	+	-	-	-	Br?	A
<i>Coccothraustes coccothraustes</i>	-	-	O	O	O	O	O	O	O	O	+	-	Br	A, B
<i>Passer rutilans</i>	-	-	-	-	+	+	+	+	+	O	-	-	Br	A, C
<i>Passer montanus</i>	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	Br	B, C, D, E
<i>Sturnia sturnia</i>	-	-	-	O	O	O	O	O	O	-	-	-	Br	A, B, C
<i>Sturnus cineraceus</i>	+	+	O	O	O	O	O	O	O	O	+	+	Br	A, B, C
<i>Garrulus glandarius</i>	O	O	O	O	-	-	-	-	O	O	O	O		A
<i>Corvus corone</i>	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	Br	A, B, C, D, E
<i>C. macrorhynchos</i>	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	Br?	A, B, C, D, E

O: common or abundant, +: uncommon or rare, -: absent, Br: breeder, Br?: considered to be breeder. A, B, C, D, E, F and G are the same in Fig. 1, respectively. Scientific names follow the Ornithological Society of Japan (1971).

ムクドリ *Sturnus cineraceus*: 1971 年までは冬に単独個体がときどき見られる程度であったが, 1972, 1973 の兩年の冬には 10 数羽の群が住宅地を中心によく見ら

れた。北海道でこの種は夏鳥で, 冬には非常にまれであるとされているが (清棲, 1965), 美唄での生息状況を見ると, 一部は留鳥といえる。なお網走では月に 30 羽の

Table 2. First sight records for the year.

	1966	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973
<i>Tringa hypoleucos</i>	*	*	Apr. 18	Apr. 12	Apr. 19	*	Apr. 15	Apr. 22
<i>Gallinago hardwickii</i>	Apr. 21	Apr. 19	Apr. 20	Apr. 20	*	Apr. 13	Apr. 20	Apr. 19
<i>Streptopelia orientalis</i>	*	*	*	*	*	*	Mar. 27	Mar. 30
<i>Cuculus canorus</i>	May 16	May 19	May 18	May 19	May 20	May 18	May 29	May 20
<i>C. saturatus</i>	May 11	*	*	*	May 12	May 8	May 6	May 7
<i>Jynx torquilla</i>	May 11	May 2	May 1	*	May 19	May 12	Apr. 16	Apr. 21
<i>Alauda arvensis</i>	*	Mar. 27	*	*	*	*	Mar. 26	Apr. 1
<i>Lanius bucephalus</i>	*	*	Apr. 1	Apr. 8	Apr. 3	*	*	*
<i>Bombycilla garrulus</i>	*	Oct. 24	*	*	Nov. 26	*	Dec. 6	*
<i>Turdus cardis</i>	*	*	Apr. 23	*	*	Apr. 21	Apr. 23	Apr. 25
<i>T. chrysolaus</i>	May 3	Apr. 24	May 4	May 1	May 3	Apr. 30	Apr. 30	May 2
<i>T. naumanni</i>	*	Oct. 30	*	*	Oct. 28	Oct. 7	Sep. 30	Oct. 8
<i>Cettia squameiceps</i>	May 10	May 2	*	*	May 15	May 10	*	*
<i>C. diphone</i>	Apr. 21	*	*	*	*	Apr. 28	Apr. 24	*
<i>Acrocephalus arundinaceus</i>	May 19	May 17	*	*	*	*	*	*
<i>Phylloscopus occipitalis</i>	May 7	May 2	*	*	May 15	May 12	May 8	*
<i>Muscicapa narcissina</i>	May 10	May 11	*	*	May 17	May 17	*	May 13
<i>Emberiza cioides</i>	*	Apr. 15	*	*	Apr. 18	*	Apr. 25	Apr. 15
<i>E. fucata</i>	*	*	*	*	May 21	*	*	Apr. 25
<i>E. rustica</i>	*	Oct. 12	*	*	Nov. 14	Oct. 23	Oct. 8	Oct. 18
<i>E. spodocephala</i>	Apr. 21	Apr. 28	Apr. 24	Apr. 20	Apr. 23	Apr. 21	Apr. 21	Apr. 15
<i>Carduelis sinica</i>	*	Mar. 30	*	Apr. 9	Mar. 29	*	Mar. 23	Mar. 30
<i>Eophona personata</i>	*	*	May 3	*	*	*	May 1	*
<i>Sturnia sturnina</i>	May 9	Apr. 28	*	*	*	*	*	*

* : unknown

Table 3. Last sight records for the year.

	1966	1967	1970	1971	1972	1973
<i>Gallinago hardwickii</i>	Aug. 22	*	Sep. 16	Aug. 20	*	*
<i>Streptopelia orientalis</i>	Oct. 19	Oct. 30	*	Oct. 30	*	Oct. 27
<i>Cuculus canorus</i>	Sep. 5	*	*	Aug. 21	*	*
<i>Alauda arvensis</i>	*	*	Oct. 7	Oct. 11	Oct. 8	Oct. 7
<i>Bombycilla garrulus</i>	*	*	*	*	Feb. 26	Mar. 8
<i>Turdus cardis</i>	Aug. 24	*	*	Aug. 14	*	*
<i>T. chrysolaus</i>	Sep. 5	Aug. 28	*	*	Aug. 23	*
<i>T. naumanni</i>	*	*	*	*	May 4	*
<i>Cettia squameiceps</i>	*	*	*	Sep. 30	*	*
<i>C. diphone</i>	*	Oct. 12	*	Sep. 30	*	*
<i>Emberiza cioides</i>	*	Oct. 12	*	*	*	*
<i>E. spodocephala</i>	Oct. 19	Oct. 12	Oct. 25	Oct. 25	Oct. 8	Nov. 2

* : unknown

群が観察されたこともある (KEITH and YOSHII, 1962)。

初認と終認の記録

表-1 に各種の生息期間を月単位で示したが、できるだけ正確な生息期間を示すため、比較的観察記録の多い種について、初認と終認の記録を示しておく (Table 2)。夏鳥の渡来時は繁殖期が始まる時期で、さえずりが顕著であるため、初認の記録が多い。夏鳥の初渡来日は年により多少異なるが、特定の年に各種の渡来日が一齐に早くなったり遅れたりする傾向はみられない。一方、冬鳥の初渡日は年によりかなり異なる。終認記録は、観察例が少ないためははっきりしないが、年により相当異なる (Table 3)。これは、記録がなき声か姿によるものかの相

Fig. 3. Seasonal change in the number of abundant and common species at Bibai, central Hokkaido. Solid: total number of species, broken: summer visitor dotted: winter visitor and transient

種類数の季節変化

一般に、北海道に生息する鳥類の多くは夏鳥や旅鳥なので、冬の鳥相は非常に貧弱となる。具体的に森林の鳥類についてはすでに報告した (藤巻, 1970)。Table 1 から美唄の鳥類についても同様のことがうかがえるが、それをよりはっきりさせるため、種類数の季節変化としてみてみよう。これまでに 1, 2 回しか観察されなかったような種を除き、種類数の季節変化を示したのが Fig. 3 である。

1~2 月は留鳥と冬鳥だけで、20 種と少ない。3 月中旬を過ぎると夏鳥が渡来しはじめ、5 月にかけて急激に増える。5~7 月には 60 種以上が見られるが、8 月から 10 月にかけて夏鳥が渡去しはじめ、種類数は減少する。10 月に冬鳥や旅鳥が渡来するが、それらの種類数は少なく、全体に増えることはない。11~12 月には再び 25 種近くになる。夏鳥は 60%, 留鳥は 30%, 冬鳥と旅鳥を合わせて 10% である。このように種類数の季節変化は、夏鳥の渡来と渡去に大きく左右される。

本州中部、例えば三重県長島町の例 (倉田, 1971) と比べてみる (ただし海鳥、海ガモ類、まれな種を除く)。美唄と異なり、留鳥がもっとも多く 50%, ついで冬鳥が 27%, 夏鳥はわずか 16% である (Table 4)。これは、美唄の夏鳥の一部が、長島では留鳥または冬鳥となっているためである。

生息環境と鳥相

鳥類の生息環境という点からみると、大まかに美唄には、落葉広葉樹林、農耕地 (主に水田)、泥炭地、住宅地、陸水 (川、池、沼) 域がある。各環境ごとの鳥相の性格を、北海道の他地域の鳥相と比較しながら明らかにしたい。そのためには、もちろん種類相だけでなく、各種の生息密度という量的な側面を考慮しなければならない。量的な比較については続報で検討する予定なので、今回は種類相の比較からわかる事実を簡単に指摘しておくにとどめる。比較対象としては、周年、少なくとも繁

Table 4. Number of species of residents, summer visitors, winter visitors and transients in Hokkaido and central Honshu.

	Resident (%)	Summer visitor (%)	Winter visitor (%)	Transient (%)	Total	Source
Central Hokkaido (Bibai)	24 (31)	46 (60)	4 (5)	3 (4)	77	The present study
Central Honshu (Mie Pref.)	30 (48)	10 (16)	17 (27)	6 (9)	63	KURATA (1971)

殖期の観察記録のある地域に限定した。

札幌市の藻岩山は落葉広葉樹の天然林として有名であるが、ここでは71種が記録されている(藤巻, 1967b)。また苫小牧にある北大演習林の広葉樹天然林では、6, 7月に41種の記録がある(石城・松岡, 1972)。この両方に共通する種で美唄の林で見られない種は、エゾライチョウ、アオバズク、フクロウ、トラツグミ、コサメビタキで、このほかヤマシギ、アカショウビン、クマゲラ、コルリの生息期間が著しく短い。調査した林は二次林で大木がなく、このことが大きな樹洞を必要とする種が繁殖していない原因であると推測できる。しかしその他の種については説明できない。

針広混交林の鳥相(藤巻, 1970)と比べると、ミソザザイ、キクイタダキ、ヒガラ、キバシリ、ウソ、カケスといった留鳥が、夏に美唄で見られず、ムシクイは渡りのとき一時的に見られるだけである。これらの一部は、針葉樹のある林を主な生息場所とする種、または亜高山帯の森林の種である。

農耕地の鳥相は、北大第一農場の例(藤巻, 1967a)があるが、美唄の場合と大差ない。

泥炭地灌木草原では、下湧別の原野(小林, 1941)、サロベツ原野の泥炭地草原・灌木林(北海道開発局, 1972)と比べると、美唄にはシマセンニュウがいない。この種は、私がこれまでに観察した範囲では、日本海側では苫前以北、オホーツク海沿岸、太平洋側では根釧地方に分布している。森岡(1971)は、アリスイ、ノゴマ、シマセンニュウ、マキノセンニュウ、シマアオジ、オオジュリン、ベニマシコを北海道東北部の草原に特有な種としているが、シマセンニュウ以外についての彼の見解は正しくない。美唄についてはTable 1に示すとおりである。また美唄以外でも、ウトナイト沼周辺の灌木草原、石狩平野の所々に残る原野で普通に繁殖している。

住宅地の鳥類では、比べるものがない。

陸水域についてみると、サロベツ原野の西にある稚咲内海岸砂丘林の沼では、夏にアカエリカイツブリ、ヨシガモ、キンクロハジロ、ミコアイサが多いが(北海道開発局, 1972)、美唄では後の3種がいないか、いても少ない。これらは、もともとより高緯度に分布する種である。

こうして、いくつかの地域の鳥相と比べてみると、どのような鳥類が美唄に生息していないかがわかる。この

うち、森林の鳥類では、分布帯が同じでも林相の違いにより生息しない場合と、分布帯が異なるために生息しない場合がある。一方、草原の鳥や水鳥では、分布帯が異なるために生息しない例が多いといえよう。

引用文献

- 美唄史編さん委員会, 1970: 美唄市史, 997 pp. 美唄市
 藤巻裕蔵, 1959: 石狩でヘラシギを観察, 野鳥 24: 183
 ———, 1967a: 北海道大学第一農場の鳥類, 北林試報 5: 33~41
 ———, 1967b: 藻岩山の鳥, 林 186: 30~40
 ———, 1970: 北海道中央部における天然林と人工林の鳥相の比較, 北林試報 8: 41~51
 北海道林業試験場, 1934: 野幌国有林内の動物調査書 40 pp
 北海道開発局, 1972: サロベツ総合調査報告書, 泥炭地の生態 VII 生物部門 75 pp
 井上元則, 1947: 北海道石狩平野の鳥, 生物増刊 1: 137~145
 石城謙吉, 1966: モズとアカモズのなわばり関係について, 日生態会誌 16: 87~93
 石城謙吉・松岡 茂, 北海道大学苫小牧地方演習林の鳥類相 その 1, 広葉樹天然林と針葉樹人工林における夏期の種構成と生息密度, 北大演習林研報 29: 43~54
 KEITH, G. S. and M. YOSHII. 1962: A short survey of winter birdlife in eastern Hokkaido, 鳥 17: 54~65
 清棲幸保, 1965: 日本鳥類大図鑑(増補新訂版) I, II, 講談社, 東京
 倉田 篤, 1971: 紀伊長島の鳥類, 54 pp
 黒田長礼, 1969: 日本産ガン・カモ科鳥類の渡来地表 III, 鳥 19: 93~108
 小林桂助, 1941: 北海道下湧別で繁殖する鳥, 野鳥, 8: 608~657(森岡(1971)より再引用)
 三島冬嗣, 1959: 北海道のエゾメジロの考証, 野鳥, 24: 173~175
 森岡弘之, 1971: 北海道高山地帯の鳥相, 国立科博専報 4: 43~54
 日本鳥学会, 1958: 日本鳥類目録 改訂4版 264 pp
 ———, 1971: 日本鳥類目録第5版編集中間報告, 鳥 20: 209~224
 札幌営林局, 1971: 野幌自然休養林内に生息する鳥類報告書, 109 pp
 ———, 1972: 野幌自然休養林内の人工林における野生鳥類報告書, 32 pp
 SHIBAEV, Y. V., 1971: On spring migration of the waterfowl in the southernmost of Khasan district, Southern Primorye territory. Ornithological researches in the South of the Far East. 155~169. (原文ロシア語)。

(Received Nov. 4, 1973)